巻き戻り令息の脱・悪役計画２

Characters

Makimodori reisoku no
datsu-akuyaku
keikaku

ニコラ・ヴェルデ

オルフェオの忠実な側近の一人。
元々はヘタレで
気弱な苦労性だったが、
オルフェオの影響で、自信に満ちた
エリートに大変身した。

ルドヴィク・ヴィオレット

ヴィオレット公爵家の双子兄妹の兄。
ポーカーフェイスや
ミステリアスな雰囲気から
近付きがたく思われることが多いが、
中身はかなりの常識人。

ルドヴィカ・ヴィオレット

ヴィオレット公爵家の
双子兄妹の妹。
ルドヴィクと同様の理由で
近付きがたく思われるが、
中身は結構な不思議ちゃん。
秘密の趣味を持っている。

アンジェラ・ローザ

「天使と愛の輪舞を」のヒロイン。
無邪気かつ天真爛漫で、
おっちょこちょいなドジっ子だが、
本人にその自覚はない。

オルフェオ・ロッソ

ロッソ伯爵家の嫡男で、
乙女ゲーム「天使と愛の輪舞を」の悪役令息。
父フェランドが悪役に仕立て上げようとするのを、
「周囲の助けと自身のカリスマ性を
駆使して対抗している。
推しであるアレッシオがかっこよすぎるあまり、
心の中で悶えていることがある。

アレッシオ・ブルーノ

乙女ゲーム「天使と愛の輪舞を」の
攻略対象の一人で、
とてもイケメンで能力もチート級。
伯爵家に仕える執事だが、
いまはオルフェオ個人に忠誠を誓っている。

プロローグ

「進級おめでとうございます、若君。制服に違和感はありませんか？　寸法は直しておりますが」
「ちょうどいいよ、アレッシオ。ありがとう」
「若様、高等部への進級おめでとうございます。今朝の制服、いつも以上にお似合いです」
「バッジ以外は何も変わらんぞ？　だがありがとうな、エルメ」
昨年より小さく感じる姿見の中、執事のアレッシオと専属メイドのエルメリンダが俺の後ろで笑みを浮かべていた。
二人からの祝福を心地よく聞きながら、俺は左側の襟（えり）にある学生バッジにそっと触れる。
大樹が数字の『一』を抱え込むデザインの学生バッジ。これが去年は、新芽が『三』を囲むデザインだった。
学園に入ってから一年。
俺が今の性格になってからは四年。
いろんなことがありすぎて、「もう」ではなく「やっと」四年かという感覚のほうが強い。
四年前のある日、俺は目覚めたら乙女ゲームの中の悪役令息、オルフェオ・ロッソになっていた。

正しくは悪役になる前の、九歳のツヤツヤ美少年である。
――なんだこれ。どういうこと？
そう自問する俺の中に、答えは次々と浮かんできた。
『俺』は日本に生まれ育ち、乙女ゲーム開発の仕事をしていた。プライベートで好きになる対象は同性。ただし臆病な草食系なので、彼氏ができた経験はゼロ。どちらかといえば非現実なキラキラ美形が好きで、そんなキャラと疑似恋愛を楽しめる乙女ゲームは個人的な趣味でもあった。
残念ながら内容を熟知しているせいで遊べなかったものの、あくまでも仕事で一通りプレイした自社製品の中で、最も強く印象に残ったのが《天使と愛の輪舞（ロンド）を》というゲーム。
あろうことか『俺』は攻略対象の一人にハートのど真ん中を撃ち抜かれ、開発側の人間でありながら課金しそうな勢いで沼ってしまったのだ。
現実にいたら避けるであろう、荒（すさ）んだ雰囲気と陰りのある瞳の、なんとも危険な香り漂うクールな男。
攻略対象一と言われるほどのルックスの良さを誇り、設定に唯一『チート』と書かれたほどのキャラ。なのに、ゲイという攻めたスパイスを加えられてしまったせいで、「乙女ゲームでやるな」「ヒロインとくっつけたくない」などと、一部では地雷ルート扱いをされていた。
その男の名をアレッシオ・ブルーノという。俺の執事と同じ名前だね。それもそのはず、本人ですから。
ついでにもう一人、「こいつ不憫（ふびん）やなぁ」という意味で印象に残るキャラがいた。

全ルートで敵になることから、ファンに『金太郎あめ悪役』などとけちょんけちょんに言われていた悪役令息、オルフェオ・ロッソ。
成金趣味な服を着て、取り巻きをゾロゾロ引き連れた典型的な悪役だったのだが……
『俺』は知っている。本当なら彼も攻略対象になるはずだったのに、大人の事情で救済ルートが闇に葬られてしまった可哀想なキャラなのである。
ただ、それが俺ってどういうことですか。
これは転生なの？　憑依（ひょうい）なの？
そのどちらでもなかった。俺は紛れもなくオルフェオ本人であり、既に一度断罪され、命を落として九歳に巻き戻ったのだ。
父フェランドにとって、俺は出来損ないの息子だった。巻き戻る前の俺は、どれほど頑張っても認めてもらえず、すっかり歪（ゆが）んで育ってしまった。
悪役に相応（ふさわ）しく大勢の人々を不幸にし、やがてシナリオ通りに捕えられて膝を突く俺の前に、悲しげに涙を流すヒロインが立ち。
騎士よろしく彼女を守る五人の攻略対象者達によって、身に覚えのない罪状をいくつも読み上げられ、知らないと叫んでも信じてもらえず牢獄に放り込まれ。
恐怖と空腹に苛（さいな）まれながら、毎日ひたすら考え続けてようやく悟った。
全部、自分が悪かったんだと。
そんな中、何ヶ月にも及ぶ過酷な牢生活で死にかけていた俺の前に、不思議な白い子猫が現れた。

『オルフェオ・ロッソ。おまえ、やり直ししたい？』
悪魔だというその子猫は、無邪気な声で問いかけてきた。代償に命もらっちゃうけどいい？　と。
俺は望んだ。もしそれができるなら、あの日から今日までずっと間違えてきた、さまざまなことをやり直してみたい。
契約は成り、俺は確かに十九歳になる少し手前で命を落として、九歳に巻き戻った。
ところがそこで予想外のことが起こった。
実は子猫ちゃん、異世界の『俺』の知識を『攻略本』として使えるよう、俺の中に植え付けていたらしいのである。理由は、そのほうが面白そうだから。
そうしたらなんと、死の直前で俺の精神が弱り切っていたせいで、ただの知識に過ぎなかった『俺』に人格が呑み込まれてしまったのだ。
そんなわけでオルフェオ本人でありながら、キャラの裏設定まで熟知しているゲームクリエイターな俺が爆誕した。
子猫ちゃんは「にゃんてことだ」と小さな頭を抱えていたけれど、結果オーライだよ。おかげで俺は自分を追い詰めた者の正体に気付き、それに対抗することができているのだから。
――フェランド。元凶はあいつだった。
兄貴の子を宿した女性を妻にし、生まれた俺を実子としながら、悪童に育つよう仕向けたんだ。
ははは、やってくれんじゃねーか……今度は都合よく踊ってやると思うなよ？
俺は幻の攻略対象としてのポテンシャルをフルに生かし、立ち居ふるまいとマナーをとことん鍛え、さらには『俺』の知識も流用して成績を上げまくった。
そして本来ならば十二歳で初等部一年に入る学園を、二年スキップして三年から入学したのだった。
この子は頭の出来が悪く怠惰な問題児で困っている？　飛び級入学しましたが何か？
くっくっく、お勉強は楽しいなあ！
そんな感じで、俺は脱・悪役道を邁進。継母も弟妹も使用人達も片っ端から味方につけ、元攻略対象達も今や全員が俺の陣営に加わっている。
義弟のジルベルトは天使だし。
記憶力のお化けなニコラと、大商会の天才児ラウルは俺の側近に。
学園で最も身分の高いルドヴィクは、仲良しグループのお友達。
アレッシオに至っては、ロッソ王都邸の自慢の執事だ。
……アレッシオの件では、やらかしちまったけどな。
当主のフェランドより俺を優先させるための脅迫材料を作ろうとして、大失敗して迷惑をかけてしまった。
だがアレッシオは交換条件を持ちかけ、期間限定とはいえ、フェランドではなく俺を主君とすると約束してくれた。
その条件っていうのが……俺が大人になったら、結婚でもしますかってことなんだけど。
え、ご褒美ですか？

いやいやいや、男同士だし、貴族と平民だし。
ただの口約束にしかならないけどって、持ちかけた本人もサラッと仰ってましたが？
「嫌なら別にいいです」とか言われたら、「嫌じゃない!!」って力いっぱい答えるしかないじゃん!?
そんなわけで、やや上下が逆転している気がしなくもない主従契約が結ばれた。
まあ、実のところ交換条件っていうより、子供の俺が二度と自棄（やけ）を起こさないよう、大人として対策しただけなんだろうけど。
口約束のままごとでも、嬉しいもんは嬉しい。
子猫との約束のリミットは十九歳の誕生日の少し手前。その時まで、アレッシオがままごとに付き合ってくれたらいいな、なんて思うのだった。

第一章　ヒロインと失われた奇跡

高等部の一年に上がった、十三歳の春。
俺は飛び級入学をしたから、同い年の生徒はみんな初等部の二年生であり、交流はまったくない。
俺のいる最上位クラスは伯爵以上の身分の子女と、昨年度の成績上位者で構成されている。高位貴族の子女だけは自動的に同じクラスになる仕組みなんだが、たまたま俺のクラスメイトには怠（なま）け者がいなかったらしく、全員がきっちり学年トップクラスの成績を維持し、胸を張ってまた同じクラスになれた。
俺の側近であり、一緒に飛び級入学をした、ひとつ年下のアランツォーネ男爵令息のラウルも。
ヴィオレット公爵家の双子の兄妹、ルドヴィクとルドヴィカも。
その従者トリオの一人であるステファノ・カルネ子爵令息も、当たり前に同じクラスになった。
それから、同じく従者トリオのフィン・アルジェント伯爵令息と、サミュエル・ジャッロ子爵令息は高等部の二年に。
俺のもう一人の側近、ヴェルデ子爵令息のニコラは、高等部の三年に上がった。
もちろん彼ら全員、最上位クラスだ。
ランチ時になると相変わらず、この面子（メンツ）で集まって食べている。ただし最近のランチは食堂では

なく、高位貴族専用のサロンを利用していた。
このところ食堂では、なんとか俺達に近付きたいっつうギラついた視線をよく感じるもんでさ。落ち着いてメシを食うどころじゃないのよ。
皆でどうしようねと話し合った時、アルジェント殿が提案してくれたのが、治安の良いサロンを使うことだった。
サロンは食堂と渡り廊下で繋がる建物にあり、出入口の両脇には警備員が立っている。
上品な制服を着ていても、警備員は警備員。彼らは不審者だけでなく、勝手に入り込もうとする強引な下位貴族の生徒も追い返してくれるのだ。
高位貴族の連れであれば、身分が低くとも一緒に入って構わない、俺達以外も利用するオープンな場所。
食事は学園のメイドに事前に頼んでおけば、全員分を昼食時に合わせて食堂から運んでくれる。
余談だが、傍若無人で行儀が悪かった悪役令息時代の俺は出禁をくらっていた。

「野暮用ができたので少し遅れます。さっさと片付けるので先に食べていてください」
学年が上がって何日か経ったある日、ラウルがそう言って一時離脱した。
野暮用って何かなと思いつつ、ラウル以外のいつもの面子（メンツ）でサロンに集まる。
広々と快適な場所で料理の到着を待ちながら、俺は「そういえば」と口をひらいた。
「ヴィク様達は、何故ここを利用していなかったのですか？」

こんないい場所があるのに、なんでいつも食堂でメシ食ってたんだろう。
俺としては素朴な疑問だったんだが、ルドヴィクは少し気まずそうな顔をした。
「あまり自分が特別であると主張したくはなかったというか、な」
あ、なるほどね。既に悪い意味で特別視されて距離を置かれているのに、さらに特別感の上塗りをしたくなかったわけか。
きみら兄妹、見た目と才能はともかく、心は普通の人だもんな。
「だが今年度早々に、いいことがあった」
しみじみ嬉しそうに言うルドヴィクに、俺達も頷きを返した。本当に、幸先いいよね。
ヴィオレット兄妹が遠巻きにされる元凶となった迷信――黒髪と紫の瞳の組み合わせが悪魔の化身とかいうやつ――は、俺やラウルが普通に友達付き合いをしているうちに薄まってはいた。
それが勇気を出して話しかけてくれたクラスメイトのおかげで、完全に消し飛ばされたのだ。

『ヴィク様とヴィカ様の髪と瞳の色、何故これが忌避（きひ）される特徴になったんだろうな』
『僕もそれ、気になっていました。父もよくわからないみたいなんですよね』
代わり映えのない顔ぶれで新学年がスタートした日、双子の周囲でぴりぴりと緊張感が漂う教室の様子に、俺とラウルが何気なくそんな話をしていた時だった。
『あの……申し訳ありません、お話が聞こえてしまいまして』
たまたま近くで聞いていた男子が、ガチゴチの表情で俺達に声をかけてきた。

俺の机を中心に、ラウル、ヴィオレット兄妹、カルネ殿という、学年のいわばカーストトップが全員揃っている。
そこに声をかけるには、相当に勇気を振り絞る必要があったことだろう。
『僕は趣味で外国の昔話を調べているのですが、例えば、黒髪黒目の民族しかいない国では、それ以外の色すべてが不吉とされていたり、別の国では逆に黒い目が不吉だったりと、世界中にそんな話が残っているのです』
彼が語り始めたのは、まさしく俺達の疑問への答えだった。
『中には敵国の将兵の容姿の色が、後代まで悪魔の色と語り継がれていた例もあります。ほかにも、詐欺師が王に取り入ろうとして悪魔の化身の特徴を創作したら、民衆にそれが広まり定着してしまったというとんでもない話もありました。なので、その……ヴィオレット様ご兄妹も、そういうのの一例なのじゃないかな、と僕は思います』
だが彼はもっと重要なことを教えてくれた。なんと彼はヴィオレット兄妹が恐れられていた本当の理由を、これまでまったく知らなかったというのだ。身分の高さと神秘的な容姿を持つ男女の双子という点だけで、皆は二人に近付き難いのだろうなと、そんな風に思っていたらしい。
その男子の近くにいた生徒までが「え？」という顔をしているのが目に入り、俺はもしや、と閃いて立ち上がった。
『すみません、クラスの皆さん。ご協力いただきたいのですが、もしご存じであれば挙手願えますか？』

『ロッソ様？』
『どうなさいましたの？』
『我々の祖父母世代には、黒髪に紫の瞳が悪魔の化身という迷信があります。そのことをご存じの方は？』
そして結果は。
『え……』
『えぇ……？』
『皆様、ご存じなかったの？』
『あ、ああ……初めて聞いた』
なんと、迷信の存在を知っている者は、わずか三分の一ほどだった。
つまり大半は理由も知らずに、「皆があの双子は不吉だと怖がっているから何かあるんだろう」と、深読みしてビビっていたのである。
なぁ～んだ、という空気が教室中に満ち、そこからは打ち解けるのが早かった。
『申し訳ございません、ヴィオレット様、ヴィオレット嬢』
『わたくし達、とても感じが悪かったですわよね……』
『自分が恥ずかしいです』
『まったくだよ。このようなバカバカしいことで……』
ほんと、バカバカしいよねえ。

祖父母から聞かされていた者も、この空気感の中、自分達がくだらないことを気にしていたと悟ったようだ。
この急激な変化にヴィオレット兄妹は面食らいつつ、嬉しそうにほんのり赤面していた。

それ以来、我がクラスの空気は一気に良くなった。
ただ、双子の周辺が少々わずらわしくなったのはそのせいでもある。あの一件が他のクラスや学年にも伝わり、無意味に怖がる者が減った反面、無駄な野心を燃やす輩が増えてしまったのだ。
「おまえ達には面倒をかけてすまない」
ルドヴィクは俺とニコラに視線を合わせて謝った。従者トリオは「このぐらい手間ですらありません」と答えるのが、詫びる前からわかり切っているからな。
「面倒ではありませんよ。こんな風に落ち着いて食べられる場所があるとは知りませんでしたから、得をした気分です」
「僕も。むしろこういう経験は楽しいですよ」
俺の言葉に頷きながら、ニコラも穏やかな笑顔を浮かべている。
ちなみにニコラは高等部三年にして、とうとう学年首席になった。年度末の試験で、ほぼ全教科満点だったらしい。
ゲームでは卒業するまでずっと残念な秀才呼ばわりをされていたのに、心の余裕と時間さえあれば、そんな成績を取れる奴だったと証明した。

もう誰もニコラを嘲笑（ちょうしょう）することはできない。おまけにアレッシオが教育しまくった甲斐あって、最近のニコラは一段と有能な秘書っぽくなっている。髪型や服装にも気を遣うようになったし、姿勢はまっすぐで、喋り方も明瞭。イケメン度が爆上がりなのだ。
教育が効きすぎて、彼はネクストステージに行ってしまった。モサいネガティブ青年よ、いずこ……。一年経って断罪の日の外見に近付くかと思いきや、逆に掛け離れた。
そんなわけで現在、ニコラの周辺もにわかに騒がしくなっている。彼は婚活市場の優良物件に踊り出てしまったのだ。
「皆さんすみません、遅くなりました」
料理が運ばれてきて間もなく、ラウルが到着した。
彼の外見は去年からさほど変化がない。多少背が伸びたかな、ぐらいだ。小柄さで相手の油断を誘うのを得意としているから、ルドヴィカより背が小さくとも本人に悲壮感はない。
「何かあったのか？　野暮用とのことだったが」
どことなく不機嫌そうなので訊いてみると、ラウルは俺の左隣の椅子に座りながら、はっきりと顔をしかめた。
気楽な友人同士の集まりだから、席順は厳格な身分並びではない。俺が中央に座る場合、ニコラは右手側、ラウルは左手側に座ることが多かった。
「面識のない後輩に呼び出されたんです。やけに高圧的で面倒そうな上位のご令嬢だったんですが、室内ではなく人目もある場所の指定でしたし、目的を確認するために応じました。――早い話が、

若様目当てでしたよ」
「私？」
俺に何の用だ。仕事の話ならラウルを通させているが、それは無関係ということだよな。
「わたくしこそがあの麗しいロッソ様に相応しいのですおまえもそう思うでしょうとか、平民上がりごときは逆らわずにわたくしをロッソ様に紹介すればいいのとか、笑いを取りにくる作戦かなと思いました。ヴィオレット様が周りをガチガチに固めてくださっているから、若様に近付く隙がなくて、僕やニコラ先輩を使おうとするご令嬢がいるんですよ」
「……冗談だろう？」
それ、ルドヴィク目当てじゃないの？　婚活ターゲット俺？
「僕らの苦労を冗談で片付ける気ですか？」
ラウルの目が据わっている。
ご、ごめんよ。でもホントに？
ニコラに目で問うと、彼は微苦笑を返した。……マジですか。
でも、そうか。悪役をやんなきゃ、俺も普通に優良物件だった。公爵令息みたいなド狭い門より、妥協して伯爵令息の俺を狙うほうが勝率高いって思われるか。
「一周回って愉快な方だったんですが、残念ながら昼休みを潰すわけにいかず、キイキイやかましいのを放置してきたんですけど。その後、妙なのに遭遇しまして」
放置しても支障のない、上の身分のご令嬢か。お嬢さんが知らないだけで、パパがラウルくんち

に借金でもしてたりして。
それを超える妙なのとはいったい？
「若様、アンジェラ・ローザという令嬢をご存じですか？」
「アンジェラ・ローザ？　ん～……親戚にもそのような名前の令嬢はいないはずだが」
「お知り合いではないんですよね？」
「まったく」
首を横に振った。
巻き戻り前から数えても、一度だってお知り合いになったことはないなぁ。むかーし制作に携わった乙女ゲームの中にそんな名前のヒロインがいたような気がしなくもないけど、誰だろ～？
「ごめん、ちょっといいかい」
いわゆるお誕生日席に座っていたカルネ殿が、俺達のやり取りに片手を挙げて割り込んだ。
「ラウルくん、そのご令嬢、もしや初等部の一年生かな？」
「そうですよ。もしかして、カルネ様のお知り合いでしたか？」
「いや、姓に心当たりがあるんだ。エテルニア王国の駐在大使の秘書の名が、確かローザ男爵だった。先代の大使が任期を終えて新しい大使と一緒にこの国に来たんだけれど、ローザ男爵は妻子を伴っていて、末娘が今年学園に入ると聞いた。その娘じゃないかな」
「へえ。カルネ様、よくご存じですね」
「我が家は外交が強みだからね。そういう情報は結構入ってくるんだ」

へええ～……ヒロインちゃんのパパ、そんな職業だったんだ？
ゲームでは職業の設定がなかったから、全然知らなかったよ。
いつか来るとは思っていた。だけどラウルのこの様子だと、妙なヒロインムーブでもかましやがったかな？
ラウルはナイフとフォークを手に取りつつ、きゅっと眉根を寄せた。
「若様、あの令嬢には気を付けてください。何らかの方法で呼び出してきても、決してお会いにならないように。何を企んでいるのやらわかりません」
何をやったの、ヒロイン。

ラウルが一周回って愉快な女生徒を放置し、食堂へ向かう廊下を歩いていた時のこと。
心持ち急ぎながら何人かの女生徒とすれ違った際、声をかけてくる者がいたらしい。
『ラウル……？』
鈴を転がすようなその声に聞き覚えはなく、聞こえなかったふりで足を速めようとしたら――
『ラウル！　待って、あなた、ラウルでしょう⁉』
今度はもっと大きな声で呼ばれてしまい、彼は舌打ちしたくなったそうだ。
母親以外でラウルを呼び捨てにする女性はいない。しかし人目のある廊下で、あからさまに無視をしたら印象が悪すぎる。だから仕方なく、足を止めて振り返るしかなかった。
見れば珍しいローズピンクの髪と瞳の、初等部一年のバッジをつけた小柄な美少女がそこにいる。

だがラウルの胸がキュンと高鳴ることは一切なく、むしろバリバリに警戒を強めた。
まったく面識がないのに人前で声をかけ、さも親しげな態度で近付いてくるのは、すり寄ろうとする者のよく取る手段だった。
可愛らしい少女であれば無下（むげ）にはされないと、親が送り込むことさえある。
『どなたですか？　僕はあなたを存じませんが、別の者とお間違えでは？』
『あ……』
いかにも傷付いたと言わんばかりの少女の顔に、ラウルの警戒心はこれ以上なく増した。
自分が知人の少女に冷たい態度を取っているのだと、そんな風に見られかねないではないか。
『用がないのでしたらこれで』
『ま、待って！　私、アンジェラよ。アンジェラ・ローザ！　本当にわからないの？』
『しつこいですよ。僕がいつ、どこで、どのようにあなたと知り合いました？　本当に欠片（かけら）も覚えがないので教えてくれませんか』
『っ……それは……』
『その、いかにも傷付きましたという顔、やめてください。知り合いでも何でもないのに、悪者扱いされるのは迷惑です。僕は幼児の頃から記憶がありますが、あなたは一度も会ったことのない知らない人だ。これ以上食い下がるなら、学園長に訴えますよ』
耳をそばだてている周りの生徒向けに大きな声ではっきり告げると、周囲の視線はラウルではなく少女を不審がるものに変わり、彼は心底ホッとしたそうだ。

冤罪で冷たい男呼ばわりなんてごめんだもんな。
『……ごめん、なさい……』
『二度と馴れ馴れしく名を呼ばないでください。ではこれで』
『ま、待ってラウル！　訊きたいことがあるの！《セグレート》の、ペンのことよ！』
えぇ～、馴れ馴れしく呼ぶなと拒否られた直後に、懲りずに呼び捨て？　それってどうなん？
案の定、その子の不作法にギャラリーは顔をしかめ、ラウルは不愉快が限界突破して顔が能面になったという。
だが《セグレート》のペンと言われたら、思い当たることがある。
『はぁ……ペンが、なんですって？』
『あのペンは、私も作ろうとしたの。なのに、こちらの国に来たら、お父様が素晴らしいペンがあるって見せてくれて……あれは、あなたが作ったの……？』
――やはり。この娘、例のトンデモ令嬢か。
ギャラリーに人のアイデアを盗んだのかと誤解されてはまずい。そう思った彼は、わざと呆れたような表情を浮かべた。
『数年前に我が商会の者が、隣国エテルニアでアイデアを拾ってきたのですよ。なんでもその国に、ガラスでペンを作りたいと言い出した令嬢がいたそうで。ところがエテルニア王国には、それを作る技術はない。にもかかわらず、その令嬢は失敗したら無報酬などと無茶を押し付け、職人全員からそっぽを向かれたのだとか』

『え？　で、でも』
『常識外れな方がいるものですよね、成功の見込みが低いものを強引に作らせようとした上に、費用はすべて自分達で負担しろなんて、彼らの生活を何だと思っているのでしょう？　我が商会の者はアルティスタでなら作れるのではないかと考えて持ち帰り、アランツォーネと提携しているガラス工房の職人達によって完成に至りました。それが何か？』
何か？　と問われても答えられず、少女はただポカンと口を開けるばかり。
それに対して野次馬のほうが呑み込みが早く、少女に冷ややかな視線が集中する。
『そ、それなら……それなら、そのペンはやっぱり、私が最初に作ろうって思った……』
『職人の話によれば、小さなお嬢さんが来ていきなり、こんなのを作って！　と言い出したらしいです。貴族のお嬢様を無下にはできず、渋々費用の話をしてみたらキョトンとされ、とにかく作ってみてとしか言わない。話にならないので父親に訴えたら、娘が思い付きで振り回してすまない、あの子の我が儘は聞かなくていいと言われたそうですよ』
『お父様が……!?』
『良識のあるお父上ですね』
ショックを受けている少女が我に返るのを待ってやる義理などない。周りから少女への嘲笑が湧くのをさりげなく確認し、ラウルはいよいよその場を離れようと歩き始めたのだが。
『……そのアイデアを教えたのは、もしかして、オルフェオ・ロッソ？』
『は？』

聞き捨てならない呟きに、また彼の足は止まった。
『オルフェオ・ロッソが……本当はガラスペンを、思い付いて、作らせて。あなたに、そんな風に説明するように、命令したの？　言うことを、聞かされているの……？』
たどたどしい問いかけの内容に耳を疑い、とてつもない嫌悪で全身がゾロリと波立つのをこらえながら、ラウルは確信した。
この女は敵だ、と。

「――以上です。まったく、無駄に時間を使わされましたよ」
イライラしながらジュースを飲むラウルに、俺はへぇ～と頷いた。
髪、やっぱりピンクなんだな。
いや『俺』、言ったんだよ。いくらヒロインだからって、判で押したようにピンク髪にすんのはどうかってさ。
でも乙女ゲームのヒロインってピンクか茶系の髪が多いし、一発でモブじゃないのがわかるヒロイン色だってんで、これに決まっちゃったんだ。
――っていう製作裏話は置いといて。
やっちゃったな～、ヒロインちゃん。
そりゃ、いずれアクション起こすだろうなと思ってましたよ。だってラウルは、本来なら飛び級入学なんてせずに、ヒロインと同じクラスで隣の席になるはずだった。

なのにいないんだから、あれ？　って思うよな。それとなくクラスの子に訊いてみたら、去年入学した有名なアランツォーネ先輩の話が出てきて、「何で!?」ってなるわけだ。
しかもアランツォーネ先輩は、ニコラ・ヴェルデ先輩と一緒にオルフェオ・ロッソ先輩の側近をしていて、あのヴィオレット先輩方とも仲良しなんだって。
「えええぇぇ!?」ってなるよねそりゃ。
で、かつてと大幅に異なる俺達の関係性を知り、彼女は何を選んだか？
俺と敵対するか、仲良くしようとするか、関わらずにひっそり生きるか。
結果はこれ。不審者。
おまえ、よりによって一番選んではいけない第四の選択肢を……！
『凄まじい誤解があるようですが若様とお知り合いですか』と尋ねても、要領の得ないことをごにょごにょ言うし。友人ですらないのなら無礼だと咎めたら、何故かびっくりされました。何がまずかったのか、まるで理解できていない様子でして。どうも、若様が入学する前の噂を鵜呑みにしていますね」
「前の噂、か」
「ええ。それはデマなのだと説明しても、『でも、だけど、オルフェオ・ロッソはこういう人ではないの？』と同じ問いを繰り返すばかりで、話が通じないんです。誰にそれを吹き込まれたのかを確認しようとしても、こっちの質問には答えやしない」
さっぱりした飲み物だけでは不快感が収まらないようで、ラウルは深呼吸を二度ほど繰り返した。

――おいおい。キャラクター設定の『少しおっちょこちょいなドジっ娘だけどめげない頑張り屋さん』がダメな方向へ仕事しまくってるぞ。

実はオルフェオ・ロッソも自分と同じ転生者で、うまく攻略対象を味方につけてヒロインである自分を攻撃しているのでは？　と疑ったようだが、それについては当たらずとも遠からずだ。完全に的外れとは言えない。

だが、この身分社会で上位にあたる俺の名を人前で堂々と呼び捨て、名誉を傷付ける発言をしたのは、おっちょこちょいで片付けられる話ではない。

「これ以上若様の誹謗中傷を続けるようなら、そちらの家に正式に抗議すると言ってやったら、ようやく黙りましたけど。表情は納得していないのが丸わかりでした」

「その娘のお父上に憐れみが湧くな」

俺の呟きに、外交官一族のカルネ殿は特に深々と頷いた。

「外交に携わる者は、身辺が綺麗かどうかのチェックが厳しいんです。国際問題を起こしそうな輩を国外にやれないでしょう？　秘書であろうとそれは変わりません。真面目に堅実に生きてきたのに、お嬢さんのお転婆が原因で職を追われるはめになったら、ローザ男爵には同情を禁じ得ませんね」

ほんとだよ。ヒロインちゃんのパパ、今後が大変そうだわ。

いくら友好国でも、エテルニアは大国のアルティスタに気を遣っている。

そしてローザ男爵一家は、エテルニア国籍のエテルニア人。交流の多い隣国だから同じ言語を

使っているだけで、アルティスタ貴族ではない。

さて、おっちょこちょいのドジっ娘、どこまでこれを理解しているのやら。

……よかったよ。おまえがちっとも、変わっていなくて。

◆

教師の妻が産気づき、次の授業は急遽自習になった。

報せを受けるなり大慌てで飛んで行ったので、その子は両親に愛されて育つに違いない。無事産まれることを祈ろう。

ちょうどいいとばかりに、ラウルは昼休みの件を報告するため学園長室に行き、三十分ほどして戻ってきた。その足で俺のところに来たので、ヴィオレット兄妹とカルネ殿も「なんかあったな」と思ったか、各自の椅子を持って俺の机の周りに集まってくる。

クラスのみんなごめんね、俺達のことは気にせず自習を続けちゃってください。

「目撃者が既に報告してくれていて、学園長先生も僕を呼ぼうと思っていたそうです。事実確認だけだったので早く済みました。カルネ様、彼女あなたが仰った通りの生徒でしたよ」

「へえ。それでどうなったの？」

「男爵家の令嬢であり、入学したばかり。外国から来て間もないなどの点を考慮し、無知なお嬢さんがはしゃいで暴走しちゃった、という感じに処理されます」

「学園内で国際問題なんて避けたいだろうし、ひとまずはそうするしかないだろうね」
カルネ殿は納得顔で頷く。
まあ妥当だなと俺も思ったが、ルドヴィクは不満そうだった。
「オルフェを愚弄した生徒だぞ。甘いのではないか？」
普段は全然表情が変わらないのに、今はほんの少しだけ眉根が寄っている。
俺が悪く言われたことに、実はかなり腹を立てていたんだな。いい奴め。
「もちろん、それについては厳重注意の上、父親にもきっちり躾け直すよう指導してくださるそうです。それから、なんとあの令嬢、マナーの授業を取っていませんでした。学園長権限で、彼女には必修科目にさせるそうです」
これにはみんなが呆気にとられた。
その授業を選択しないのは、家で専門の教師を雇えて、学園で学ぶ必要がないほど身についている生徒だけだ。そんな生徒が初対面の相手に、不作法を連発するはずがない。
「本人は『家でしっかり学んできました』なんてほざ――申告していたそうなんですが。どうせ、練習を嫌って逃げ回っていたんじゃないですか」
はっ、と吐き捨てるラウルは、すっかりヒロインアレルギーになってしまったようだ。
ゲームのラウルは、一年目だけおとなしい猫を被っているけれど、二年目以降に親しくなれば徐々に地が出てくる、辛辣な美少年キャラだった。冷たくあしらわれてもヒロインちゃんがめげなかったのは、もともとラウルがそういうキャラだと知っていたからかもしれない。

以前はそんなラウルに好かれていた記憶があるせいで、めげずに食い下がったのかね。
結果、ウザいキモいと、本気で嫌われた。
演技などするまでもなく、俺の顔には自然と呆れが浮かぶ。
「自分はもう完璧だと、根拠のない自信を持っているだけかもな。おまえの話からすると、思い込みが激しそうじゃないか？」
俺が言うと、ラウルは「確かに」と肩をすくめた。
「本当はめちゃくちゃなのに、自分の判断だけで合格点だと思い込んでいても不思議じゃありませんね」
実のところ、マナーの授業は前に一度経験しているから、二度も受けなくていいと思ったかな。
それで知人ですらないラウルや俺のことを何度も呼び捨てにしてりゃ、免許皆伝ですと胸張ったって説得力の欠片もねぇわな。
理解した上で悪口を言ったんなら、上位者を侮辱したことで重い罪に問われるけどいい？　って話だし。
「今回限り不問に処す。ご令嬢にはしっかり弁えるよう注意してもらい、それから若様への接近禁止を学園長先生にお願いしました。勝手に決めてしまいましたが……」
「それでいいよ。ありがとう」
きっちり『接近禁止』を入れてくれるおまえは完璧だよ、ラウル。クラスのみんなにも聞こえているだろうから、俺が彼女と関わり合いになりたくないって、しっかり伝わったろう。

ルドヴィクはまだ不満そうだけれど、カルネ殿が「相手は下級生の小さい子ですし」と宥めている。
その小さい子、ラウルと同い年の子なんだけどね。

放課後、アンジェラ・ローザは父親からガツンと説教されたらしい。
学園長がローザ男爵を学園長室に呼び出したみたいで、激怒した男爵の声が廊下までビリビリ轟いていたと、帰宅前にクラスメイトがわざわざ教えに来てくれた。
……ヒロインちゃんのパパ、可哀想に。
娘のやらかし具合に我慢できなくなったのも本当だろうが、本気で説教しましたとアピールする目的もあったんだろうな。
そうしないと、「こいつも内心ではアルティスタの貴族をバカにしてるから、娘がこんな育ち方したんじゃない？」っていう疑惑を持たれる恐れがあるからね。
そのへんローザ男爵の外交感覚は確かで、両国の関係にヒビが入るリスクについても、説教の中できっちり言及していたようだ。
『おまえがどうしても学園で学びたい、真面目にやると誓ったから入学を許したのだ。それを破ってこちらの方々に迷惑をかけるなら、すぐにでもやめさせるぞ』
『そんな⁉　お父様、私、迷惑なんて――』
『バカ者！　この期に及んで、かけていないなどと言うか⁉　この状況がわからんのか⁉』

『うっ……うう、ひっく……ごめ、ごめんなさい……』
『謝るだけでなく、きちんと考え、反省するのだ。おまえはいつもそれが足りない。学園長先生のご指摘通り、マナーの授業もしっかりと受けろ。そもそも私はおまえに、マナーは取れと言っておいたな？』
『っ……』
『そうだったのですか？』
『恥ずかしながら、独断で外したようです。遠慮なく厳しく指導してやってください』
『ぐす、ひっく……ひっく……』
――と、こんな感じだったらしい。
ううむ、咄嗟に反論しかけるところが、まだまだ反省が足りないなぁ。
でもローザ男爵のほうは、言うべきことをちゃんと言ってくれる人なんだなと好感が持てた。
ところで、説教の中で気になった部分がある。
『おまえがどうしても学園で学びたいと言ったから入学を許した』という点だ。
アルティスタ王国の王立学園に通うことが義務づけられているのは、国内にいるアルティスタ王国貴族の子息令嬢のみ。外国の貴族令嬢であるアンジェラ・ローザには適用されない。
けれどゲームのプロローグで、ヒロインのモノローグはこうなっていた。
『これから住む国の学園に入ることになったの。どんなところかなあ』
どうしても入学したいと父親を説得したなんて、そんなニュアンスは一切なかった。

つまり本来であれば、親に言われるがまま何の疑問もなく学園に入る流れだったのではないか？
そのあたりがどうにも引っかかり、帰りの馬車の中でラウルに訊いてみた。
「男爵は娘の入学に前向きではなかったのだな？」
「無理もありません。以前エテルニアに行ったうちの商会の者によれば、だいぶガサツな令嬢だったみたいなので」
「がさつ？」
「ええ。これです」
ラウルは何やら手に持っていた紙を軽く振った。
「休み時間に商会へ使いをやりまして、アンジェラ・ローザについてエテルニアの担当者に問い合わせたんですよ」
つまりその回答が今、手元にある紙だそうだ。
何を読んでんのかなと思ったよ。仕事が早すぎて怖い。
「担当者によれば、商談の関係で男爵のご家庭にお邪魔し、ローズピンクの髪のお嬢さんにも会ったそうです」
「なに？　本人に会ったのか」
「名前も『アンジェラ』なので間違いないでしょう。十歳ぐらい上のご子息とご令嬢はよく躾けられていたのに、彼女は大人同士が会話しているところへ無遠慮に割り込み、終始落ち着きがなかったそうです。見た目は可愛らしいけれど、すぐに愛嬌で誤魔化そうとする困った子だと、男爵夫人がぼやいていたとか」
「へえ……」
テヘペロの常習者か。やりすぎてママは引っかからなくなったと。
「彼女のマナー、やっぱり全然なっていないんですって。男爵夫人やメイドが止めるのも聞かず、『このぐらいできるもの。見てて！』なんて自信満々に宣言して、ガッシャーン。……そういうのって、一年や二年で改善されるものでもありませんよね」
おぉ～い、ヒロインよ？
おま、自分のキャラクター設定が『少しおっちょこちょいなドジっ娘』って忘れてねえ？
ドジっ娘が自信満々に「できるもん！」って宣言したら、失敗すんのが世の理だろ！
まさか『攻略本』も類友のドジっ娘で、「私は転生者で心は大人なんだから大丈夫！」と自信満々な勘違いを……？
自覚のないドジっ娘キャラっていたよな、たくさん。真に凶悪なのは、その属性に『だけどめげない頑張り屋さん』が合体した瞬間だったのかもしれん。
何度でも、何度でも、めげずに同じドジを繰り返す。それはもはや世間一般の『頑張る』とは別の何かだ。
「そんな風に、周りはみんなハラハラしているのに、本人だけは妙に余裕ぶって真面目に捉えない傾向が強いそうで。男爵一家にとっては、不安材料の多い娘だったらしいです」
……さて。

この差は、どういうことだろうな？

◆

ニコラとラウルをそれぞれの家に送り届け、王都邸に帰宅すると、アレッシオとエルメリンダが出迎えてくれた。

「おかしな生徒に絡まれたそうですね」

玄関ホールで俺の外套を受け取りがてら、アレッシオがさらりと言った。

ラウルといいアレッシオといい、こいつらの情報網はどうなっているんだ。帰った時点でその日の出来事がもう伝わっている。

「絡まれたのはラウルだ。既に学園長が保護者を呼んで釘を刺した」

「伺っております。反省の色がやや不足しているご様子だったとか。接近禁止を破るようであれば、家としての対応が必要となりますが」

「学園内での対策はした。案じることがあるとすれば、フェランドが彼女に接触することだな」

二人を従え、自室へ向かう廊下で堂々と話す。

ここで誰に聞かれようと、フェランドへ報告する者はもういない。あの野郎の化けの皮はとっくに剥がれ、誰の目にも本性が明らかになっているからだ。

「あの男は今年もこちらに来るのだろう？」

「本邸の父からはそのように連絡がありました」

「ふん」

去年、フェランドは巻き戻り前と異なり、イレーネ親子を連れて領地に戻った。

奴にとってさんざんな社交シーズンだったろうし、今年は王都に来ないかもと、ちょっぴり期待していたんだがな。

「もし奴が私に敵意を持つ少女のことを知ったら、甘い顔で近付き、あれこれお手伝いをしてあげそうだ」

あまりにも簡単に想像がつくもんで、もはや腹も立たねぇわ。

アレッシオもそんな光景が容易に想像できたようで、声がワントーン低くなる。

「もしその令嬢が訪ねてくるようなことがあっても、門から中には入れません。速やかに男爵邸へ使いをやり、引き取らせます」

「門前でゴチャゴチャやっていたら、フェランドに見られる可能性があるぞ」

「警備隊に周知し、巡回の範囲を拡大して、接近前に確保させましょう」

「ん。そのようにしてくれ」

うちの警備隊はヤクザっぽい私兵じゃなく、貴人との接し方も心得ているちゃんとした従業員だ。

周辺の治安維持にも一役買いつつ手柄を主張しないから、王都の警官隊との仲は良好と聞いている。

「万一、その令嬢が巡回ルート外をふらふら出歩いていた場合でも、旦那様と会うことはありま

せん」
断言した。後ろを歩いているアレッシオの顔は見えない。でもなんとなく、冷酷無情な執事の顔になっている気がした。
あちこちに散らばった子飼いが、うまいこと何とかしてくれる感じかな？　ゲームでもそうだったけど、悪役時代の俺より裏稼業に適性があるぞこいつ。
……うちの警備隊、ヤクザじゃない、よね？
部屋に着くと、アレッシオがサッと前に立ってドアを開けてくれた。
「考え事をしたい。すまんが、夕食まで一人にしてくれ」
「かしこまりました。それでは、のちほどお呼びいたします」
エルメリンダとは玄関で出迎えてもらったきり、結局一言も交わしていない。でも彼女の前でアレッシオとお喋りをした時点で、情報共有はできたようなものだ。
背後でドアが閉じる音を聞きながら、クラバットを外して襟元（えりもと）をくつろげ、一人掛けのソファにぼすりと腰を落とす。
「ほほーん。とうとう来たか」
白い毛玉が俺の足をよじ登り、定位置となった膝上でころりんとヘソ天になった。
真っ白な毛並みに、きゅるんと丸いアイスブルーの瞳。ほっそりとスマートな尻尾に、隠れチャームポイントはピンクの肉球。
アムレートと名付けた数年前から、見た目がまるきり変化していない、最高にキュートな我が家

の子猫様である。
俺はふかふかのお腹を撫（な）でながら、学園での出来事をご報告した。
そうなんだ。とうとうヒロインちゃんが来たんだよ。今日こんなことがあってね～……
「ぷひゅっ！　――にゃっひゃひゃひゃ、なんじゃそら！」
子猫、超ご機嫌。おまえはこの手の土産話、喜ぶと思ったよ。
「『本当にわからないの？』って、記憶喪失じゃあるまいしわかるかってんだ！　みゅふふふふ」
だよなあ。記憶喪失じゃなく、巻き戻りだぜ。
全部リセットされていることぐらい家族や使用人で確認済だろうに、初っ端からマナー丸無視のオンパレードで絡むなんて軽率が過ぎる。
この手のヒロインはだいたい、アホか賢者かの両極端に分かれるが、アンジェラ・ローザが悟りをひらいて登場するとはまったく期待していなかった。
期待通りアホの子だったわけだが、コンタクト初日から予想を遥かに超越してくれて、コーラとポップコーンが欲しくなってしまう。
「……なあ、子猫よ。あの娘、人格・記憶ともに本人のままなんだろう？」
子猫は笑いの衝動を引っ込め、丸い目でクリンと見上げてきた。
アンジェラ・ローザは、転生者ではない。
俺と契約を交わした子猫が時を巻き戻した際、彼女の願望が中途半端に同調したり反発したりして、前回の記憶を保持することになっただけだ。

その願望とは、『生まれ変わってもまたみんなと出会って恋をしたい』というもの。
恋が第一の彼女は『繰り返し』には同調しても、素敵な恋愛の記憶が失われるのは許せなかったのか、記憶の巻き戻りに無意識に抵抗したようだ。
その結果、かつて彼女を聖女たらしめていた『力』は使い果たされ、消滅してしまったらしい。
さらに彼女にも俺と同様、あちらの世界の人間の知識が移植されているという。
子猫が意図したことではないため、俺と違って知識の選別に条件付けがされておらず、乙女ゲーム《天使と愛の輪舞を》のプレイヤーの中で、アンジェラにより近い人格の記憶が自動的に選ばれているみたいだ。
精神が疲弊していたわけではないので、人格の侵食は起こらず、性格も何もかもアンジェラ本人のまま。
だがそれを知る由もない彼女は、自分があちらの世界の出身で、ヒロインに憑依転生したと勘違いをしているのではないか。俺と子猫はそう見当をつけていた。
「そだな、もう確定だろ。それがどした？」
「彼女の周りの反応が大幅に違っている気がする」
アンジェラ・ローザは、両親や年の離れた兄姉にたっぷり愛情をそそがれ、何の不安もなく幸せに育った。
のびのび育ったからちょっぴりお転婆で、行儀作法に不安があった。父親の仕事でアルティスタ王国へ引っ越し、学園に入ることになり、マナーの授業を選択した。

とても厳しいけれど、へこたれずに頑張ろう。素敵なレディになりなさいと、両親も兄姉も応援してくれた。
それがアンジェラ・ローザという少女だった。
けれどラウルが商会の者から得た回答によれば、ここ数年のアンジェラに対する周囲の評価は、『ガサツ』『終始落ち着きがない』『愛嬌で誤魔化そうとする』などなど。
前回のローザ男爵は末娘を自由にさせていたのに、巻き戻り後は教育への姿勢に甘えがない。彼女がどうしてもとお願いしなければ、学園に入学させる気もなかった。
「ヒロインに備わっていた『天使の祝福』は、傷付いた心――負の感情に囚われて抜け出せない心を癒やしていたんだろう？　特別な呪文はなかったと記憶しているが、条件や引き金はあったのか？　設定ではそこにいるだけで周囲を癒やすニュアンスだったが、そのあたりは漠然としていたんだ」
子猫は「そだな」と言いながら、小さな前足でチョイチョイと顔を洗った。今はリラックスしている時の猫洗顔らしい。
「まず必須なのは『愛』だ。友愛だろうが家族愛だろうが、あの娘が相手に好意を持ってなきゃダメだ。引き金は、プラスの気持ちがこもった言葉をその相手にかけること」
「励ましや褒め言葉か」
「別に相手のための言葉じゃなくてもいいってのがミソだな。つまり、『ワタシめげずに頑張る！』みたいなのでもいい。もちろん、相手を肯定する意味の言葉だったら効果マシマシ」

「なんだそれは」
唖然とした。つまり『私が一番カ・ワ・イ・イ！』でもＯＫってこと？
自己愛百パーセントでも好かれるなんてズルい！
「怒りとか苛立ち、単なる気疲れなんかにも効果があったぞ。要は自分に向かう負の感情を減らし、気に入った奴を味方にして、守ってくれる者を増やす能力なわけ」
「……魅了か」
ええぇ～、あのゲームそういうのはないって思ってたのに～？
でも、この国やエテルニア王国の常識や倫理観からして、下位貴族の令嬢が高位貴族を含む逆ハーレムを実現させるには、それがないと不可能ではある。
俺の断罪時点ではまだ聖女と判明していなかったのに、あいつらはもう恋人関係になっていた。一対五で永遠の愛を誓い合ってから、ラスボスとの対決に挑んだわけだ。
思い出して半眼になり、無意味に天井の隅を見つめてしまった。
「ん～、似てるけどちょい違うな。心を操って自分への愛情を植え付けるんじゃなく、祝福の性質が結果的に好意を抱かせるんだ」
「ああ、なるほど。そういう方向か」
巻き戻り前の彼女はおそらく、何度失敗しても許されてきた。だから何度でも許されて当たり前だと思っている。
そしてポーカーフェイスも腹芸も学んでこなかったために、そう思っていることを顔にも態度にも出す。
注意しても聞かない、反省もしない楽観的なワガママ娘なんて、親からすれば「こんのクソガキィ～！」ってむかつくのが普通じゃん？
けれど前回は、そこで怒りが持続しなかった。精神的ストレスも一緒に、その場であっさり癒やされていたからだ。
怒っていた気持ちが失せれば、そこには娘への愛情だけが残る。近くにいたら不思議と心が安らぎ、穏やかな気持ちになれるので、周囲の人々はヒロインに好感を覚える。
彼女がどんなに「このぐらいできるもん！」ガッシャーン！ を連発しようと、何故か腹が立たず、「もうこの子ったらそそっかしいんだから～」で終わらせてしまう。
――だが今回は、そうはならなかった。
「祝福が消え失せた今、あの娘に向かう怒りや苛立ちは、解消されずに残ってしまう？」
「そだな。ぷひゅ」
子猫がにんまりと嗤い、俺の口角もゆるりと上がった。
『彼女が傍にいてくれれば不思議と心が安らぐ。もしやこれは恋か？』
攻略対象あるあるな感情の取り違えも、もう起こらない。
現状こそがアンジェラ・ローザという少女に対する、ごく自然な評価。要は、普通の人々と同じ土俵に立っただけ。
これは傑作だな。

晴れやかな気分でふわふわ揉み揉み子猫マッサージに勤しんでいたら、アレッシオが夕食を運んできてくれた。
美味しそうな香りでも漂っているのか、子猫が俺の膝から「みゃんっ」と飛び降り、足元にちょこんと座ってうずうずしている。
執事は俺の前にある一人用の丸テーブルに、ワゴンから手早く料理の皿を並べると、足元には小さな猫皿を置いた。
本日の猫様のゴハンは、俺のスープに入っているのと同じ魚を使ったすり身らしい。子猫の突撃具合で美味しいのがわかるな。
和みながらフォークを取ってサラダをつつき始めると、そのタイミングでアレッシオは「緊急の話ではないのですが」と前置きをして報告を始めた。
「先ほど、警官隊から注意喚起がありました。王都郊外にて大捕り物があり、違法薬物の密売組織が一網打尽にされたそうです。その中に、放校処分になった例の元学生がおりました」
「……まさか、あの薬の？」
手を止めて見上げると、彼はグラスに果実水をそそぎながら「はい、あの薬の」と頷いた。
「っ……その節は」
「どの節でしょう。記憶にございませんが」
そ、そうだったな。俺達の間には何も起こらなかった。

俺がマルコくんから妙なお薬の作り方を吹き込まれただけ。それだけさ。うん。
「話を戻しますが。その元生徒は処分後に家から勘当され、裏組織に入ったようですね。犯人が一年前まで学生だったことから、学園の生徒がいる家にはすべて連絡をしているそうです」
悪役令息の腰巾着だったマルコ・リーノに、先輩と呼ばれていた元生徒。
学園の設備を使い、オリジナルのあやしい薬――ぶっちゃけ媚薬を作っていたそいつが放校処分になったあと、その薬が学生間でどの程度広まっているかの追加調査が行われた。
幸いにも興味本位で薬を作り始めたばかりだったようで、拡大前に防げた形だったという。
その元生徒が作った薬を、裏組織が扱っていた。
最初は依存性もなく違法でもない、でも効果は確かな薬として安く販売し、客が慣れてきた頃に『本物』を売り始める……そんな手口で、警戒心が薄く好奇心の強い若者を狙い、ドロ沼に落としていったようだ。
「学園に在籍していた頃も、小遣い稼ぎのつもりで自作の薬を組織に卸していたそうです。家の経済力に不安があったわけではなく、遊び感覚だったとか。勘当されたあとは、付き合いのあった組織に拾ってもらい、言われるがままに薬を作っていたようですね」
そいつの実家の領地は、ヴィオレット公爵領にも王都にも接している。
薬が公爵領や王都の若者にどんどん広まり始め、危機感を募らせた国が捜査に乗り出した、というところか。
「これまで違法ではありませんでしたが、指定医師の許可なく調合した場合は罪になるよう、法が

改正されるそうです」
「そうなのか」
生返事をしながらグラスを直接受け取り、渇きかけた喉を潤した。

食事を終えるとアレッシオが退室し、俺は嫌がる子猫の肉球を揉み揉みしながら考え込んだ。
入れ替わりで入室してきたエルメリンダに不審がられそうになり、一旦子猫を解放して、続きは風呂で考えることにする。
適温の湯に浸かりながら、天井を見上げた。頭を占めるのは、巻き戻り前のこと。
――あの頃、その元生徒を告発した者はいたのだろうか。
「いなかったとしたら」
元生徒はバレずに悠々と卒業し、勘当もされなかった。そして本業ではなく、遊び感覚の副業で組織に薬を卸し続けた。
副業だったために販売数が抑えられ、顧客は水面下でゆるやかに増え、国から目をつけられることにもならなかった。
そしてその男はマルコ・リーノの『先輩』。
マルコ・リーノは悪役令息オルフェオの『腹心』だった。
悪役令息は危険な『本物』に手を出したことはない。遊んでいたプロのお姉さん方が、「それだけは手を出すな」と忠告してくれたからだ。悪役令息は、いつも優しくしてくれる彼女らの言には、

素直に耳を傾けた。
その代わり、マルコに教わった『魔法の薬』はよく作って使っていた。
もしその場面を第三者が目撃していたら、それがどんな薬なのか区別などつかなかったろう。
「あの薬から繋がったのか」
冤罪のひとつが、意図せずに回避されていた。

◆

翌日の朝、ニコラとラウルがアランツォーネ商会の馬車に乗って迎えに来た。彼らにはここでロッソ家の馬車に乗り換えてもらい、改めて一緒に登校するのだ。
男爵家より伯爵家の馬車のほうが注目されるし、俺がこの二人を重視していると世間に示すことにもなる。登校時間の混雑を避ける意味でも、まとめて同じ馬車に乗るのがいい。
こちらからニコラとラウルを迎えに行けばいいのではとも思ったが、毎朝俺が側近の送迎をする形になってしまうので、身分的にそれはダメだと却下された。
爽やかな朝の空気の中、いつもと変わらない時間に学園前に着くと、何故かいつもより手前で馬車が止まった。
どうしたのだろうと思っていたら、護衛が扉を開けて報告してきた。
「前方に待ち伏せをしているご令嬢がおり、教員が注意しているところです。すぐに退かせますの

で、少々お待ちください」
「……」
三人して「あー」という顔になった。みんなの心はひとつだね！
「ニコラ、カーテンを閉めてくれ」
「かしこまりました」
陽光が遮られて暗くなったけれど、これで外から俺達の姿を見られることはない。
少しして、馬車は再び動き出した。
教員が連行してくれたおかげか、馬車停めでも玄関でも怪しい人間に遭遇することはなく、俺達は悠々と高等部の学舎に到着した。
学園の規則ではないけれど、初等部の生徒は許可なく高等部の学舎に入ってはいけない暗黙のルールもあるし、ここまで来ればもう安心だろ。
ニコラと別れ、ラウルとともに教室へ向かった。俺達はいつも早めに出ているので、室内にいるクラスメイトの数はまばらだったが、みんな笑顔で挨拶してくれる。
滅多にない飛び級入学生を相手に、昨年までは戸惑いが勝っていたけれど、もうすっかり俺との接し方に慣れたようだ。ちゃんと身分差も考慮しつつ、それでいて肩の力が抜けた会話は、とても心地がいい。
このクラスの下位身分の子って、他クラスの生徒を突き離して成績がいいんだよね。よっぽどのことがなければ、卒業まで全員同じクラスでいられそうだ。

「おはよう、オルフェ」
「おはようございます、オルフェ様……」
「おはようございます、ヴィク様、ヴィカ様。……ん？」
ヴィオレット兄妹とカルネ殿も教室に入ってきたが、なんだかルドヴィクが不機嫌そう？
俺は説明担当のカルネ殿を見た。
「おはようございます、カルネ殿。ヴィク様はどうかなさったんですか？」
「おはようございます、ロッソ様。それがさっき、例の女生徒に待ち伏せされましてねえ」
「えっ」
苦笑いをするカルネ殿に、俺とラウルは目を見交わした。
なんでも、ヴィオレット兄妹と従者トリオが玄関から入って少し進んだ廊下の先に、ローズピンクの頭が見えたらしい。何人かの生徒が壁になって揉めているのが聞こえ、その間に別の生徒が彼らを迂回ルートに誘導してくれたそうだ。なんて素敵な即席チームワーク。
「あの女、釈放されたのか」
ラウルくん、釈放って。でも気持ちわかる。
俺が馬車での一件を教えてあげたら、ルドヴィクとカルネ殿も唖然とした顔になり、視線で『マジで？』と訊いてきた。半笑いで頷いてやったよ。
だってこういうの、ほとぼりが冷めてから動き出すもんだと思うじゃん？
なのに昨日の今日だし、さっきの今だし。

「あのお嬢さんの目的、ラウルくんじゃなくロッソ様ですね」
「オルフェに妙な勘違いをして、周りの者に接触しようとしているな。ラウルに私達とくれば、次はニコラに接触しようとするかもしれん。一応そちらにも注意してもらうよう、フィンとサミュエルに伝言させている」
その伝言は功を奏した。
アルジェント殿とジャッロ殿から事前に聞いていたおかげで、変な女子の待ち伏せを避けることができたと、ニコラはランチの席でルドヴィクに頭を下げた。
「ありがとうございます。助かりました」
場所はもちろん、いつものサロンである。
ここは変な男爵令嬢が単独で突撃しようとしても、門前払いにしてくれるからな。
「礼には及ばない。しかし、行動力だけは凄まじいな。称賛には値せんが」
ルドヴィクの感想に、全員がしみじみ頷いた。
滅多に不快感を示さないニコラの眉間にさえ、珍しくシワが寄っている。
「僕がよく通るルートを事前に調べたのだと思います。移動教室の時に、普段あまり通らない階段を使って上から様子を見ていたら、その女生徒らしき子がキョロキョロしながら現れました」
それを聞いてラウルも目尻を吊り上げ、苛立ちＭＡＸなのを隠さない。
「執念を感じますね。いったい何がしたいのでしょう？」
「ラウルくんの話からすると、若様に悪意を持っているようだけど、お父上の説教が効いていないのかな？　あの様子だと、僕ら全員の行動範囲を調べていそうな気がするよ」
ラウルとニコラのやり取りに、伝言役をつとめたアルジェント殿とジャッロ殿も顔を見合わせた。
「デマのほうが真実だと決めつけ、自分以外の全員が騙されていると思い込んでいるのかな？」
「けれど、そこまでむちゃくちゃな思い込みができるものですかね？」
「あの。いいかしら……？」
不意にルドヴィカが片手を挙げた。ルドヴィクやニコラの不機嫌顔よりも珍しい彼女の発言に、全員の視線がガッとそちらへ集中する。
ルドヴィカは突然の注目に怯む様子もなく、淡々とマイペースに語り始めた。
「お父様から、怖いお話を聞いたことがあるの。お母様がお若い頃、差出人の記載のないお手紙が毎日、何通も何通も届いて。しかもそれが全部、さもその方とお母様がお付き合いなさっているかのような、熱っぽい文面だったのですって」
唐突に始まった不穏な昔話に、全員が耳を澄ましている。
「お母様が別荘に行くと、その方と逢瀬を楽しんだことになっていたり、お茶会に行くと、その方とお茶をしたことになっていたり。お母様がどこで何をなさっているのか、細かく把握しているようなお手紙がとっても怖くて、お祖父様にご相談なさったのですって」
そ、それってストー……？
「その方と本当に恋仲と疑われるのが、一番怖かったそうなのだけど。お手紙の異様な数と内容を問題視したお祖父様が険しいお顔で対処してくださったから、次の日から何もなくなって、お母様

はとってもホッとなさったそうなの。お父様は、世の中にはそういうおかしな者もいるから気を付けるんだよ、って仰っていたわ。とっても怖かった……」
皆は無言で聞き入っていた。
人形めいた美しい少女が、無表情で静かに、染み入るような声音と口調で恐怖体験を語っている……まるでホラー映画の一場面だ。
語られなかったお祖父様の『対処』とは、果たして。
「――オルフェ。決して、絶対に、一人になるなよ」
「必ず僕らの誰かと一緒に行動してくださいね！」
「もし万が一、その令嬢から声をかけられることがあったとしても、若様はお答えにならないでください。話す必要がある時は、僕らが話しますから」
「きみから声をかけてもいけないよ。いいように受け取って、妄想が酷くなりかねない」
「入学して間もないのに、俺達の行動パターンを調べていたぐらいですから、妄執はかなりのものです。常識や理屈の通じない相手は厄介ですよ」
「学園側にも改めて注意をお願いしておいたほうがいいでしょう」
おまえらいっぺんに喋んな、俺は聖徳太子じゃねえ！　でもありがとう気を付けるよ！
しっかしヒロインちゃん、とうとうストーカー認定されてしまったか……いいと思います。

噂をすればヒロインの影。

俺達がサロンで唐突なホラーに震え上がっていた頃、まさにそこへローズピンクのご令嬢の襲来があったらしい。
「災難ですわね、皆様。あのようにつきまとわれるなんて」
ランチ後の授業を挟んだ次の休み時間、クラスメイトが詳細を教えてくれた。
サロンは上流社会の交流の場であり、学園においては高位貴族の子息令嬢がゆっくり交流を深めるための場所とされているものの、実態は一種の避難所だった。既に人脈を築いている高等部の生徒の利用率が高く、知り合いが近くにいても用がなければお喋りの邪魔をしない。
そういう暗黙のルールをきちんと理解できる生徒のみが利用を許され、理解できない者はつまみ出されるのだ。
「僕らはロッソくん達より早めにサロンを出たのだけど、渡り廊下の向こうから、珍しい髪色の令嬢が歩いてきてね」
あれは噂の令嬢ではないか？
すれ違ったあとも気になって振り返ると、果たして彼女は警備員に通せんぼをされていた。
『お願いです。お話をしたい方がいるので、中に入らせてください』
『なりません。お戻りください』
『……なら、出ていらっしゃるのを待ちます』
言葉通り、令嬢はその場で待ち始めた。
これは非常識で迷惑な行為だった。ただ話したいからという理由だけで、そこで待つのを一人に

立ち読みサンプル
はここまで

許したら、ほかの生徒までやり始める。
警備員の一人が建物の中へ誰かを呼びに行き、やがて中年のメイドが出てきて対応を代わった。
『お話をしたい方がいるとのことですが、その方のお名前をお聞かせ願えますでしょうか』
いかにも手ごわそうなメイドの登場に怯みつつ、取り次いでもらえると勘違いしたのか、少女は迷わずルドヴィク、ラウル、そしてニコラの名を挙げた。
俺やルドヴィカ、従者トリオの名は出なかったらしい。
『ご一緒にランチをと思ったけれど、いつも食堂にお姿がなくて。たまたま隣席になった方に尋ねたら、こちらでお食事をなさっていると聞いたんです』
その令嬢が要注意人物だと、学園のメイドに伝わっていないはずがない。彼女はただ、別の生徒に用事がある可能性も皆無ではないと考え、念のために確認しただけなのだろう。
『さようでございますか。ではお取次ぎはいたしかねます。出入口の前で待たれますと、ほかの方々のご迷惑ですのでお引き取りくださいませ』
『そんな……！　どうしても会いたいんです。入れないのは我慢しますから、どうか待たせてください』
少女は涙声になった。
だがここのメイド達は、多くの生徒の対応をしてきた百戦錬磨のプロだ。彼女らにとって、見目の良いご令嬢の泣き落としなど、珍しくもないのである。
何より、学園のルールを自分のために曲げろと要求しておきながら、断られて被害者面をする厚

かましさ。メイドの視線は氷点下になった。
『お引き取りを。足が動かないと仰るのであれば、警備員に学園長室まで運ばせましょう。いかがなさいますか』

メイドさん、強い！　拍手を送っていいだろうか。
強いだけじゃなく、そのメイドさんは子爵夫人だったそうな。身分でも余裕の勝利である。
ヒロインちゃん襲撃未遂の数日後、別のクラスメイトから続報が入ってきた。どうも学園長命令でローザ嬢のマナーの授業がとことん厳しくなり、さらに一時間延長もして、彼女のためだけの放課後特別授業が設けられることになったそうだ。
先生方、徒労感ハンパないでしょうね……お疲れ様です。
しかし、いくらドジっ子のうっかりさんでも、二周目なんだから多少はマシになっていてもよさそうなのに、全然そうでもないのはなんでだろう？
ゲームでの彼女がどうだったかを思い返してみて、合点がいった。
ハーレムルートのヒロインが聖女に認定されるのは卒業式の直後なんだが、その前日、いつも厳しかった先生が、ヒロインにこんな言葉をかけるのだ。
『まだまだですが、入学した頃と比べとても良くなりました。あなたがきちんと努力してきたことを、先生はよく知っていますよ。これからも怠けずに自己研鑽を続けてください。そうすれば、きっと素晴らしい貴婦人になれることでしょう』